

国語教育(読解指導)

松本 修

石原千秋は、国語教育・国語教科書への批評を行ってきたが、教室における学習での「読むこと」について、次のように述べている(日本国語教育学会『月刊国語教育研究』No.457 巻頭言「自由に読むこと」2010.5)。

国語における読書は「無茶苦茶に読むこと」ではいけない。何らかの根拠を、たとえ痕跡であっても、テキストの表現から示せなければならない。そしてその根拠から作り上げた「読み」を表明し、人を説得しなければならない。そこまでが、国語における「自由に読むこと」である。

読者論的な読みへの批判としてあった読みのアナーキズムに対する問題意識が、新しい学習指導要領における「交流」の重視を受けて、明確な形をとってきたと言える。読みの交流の成立のための条件については、松本修が整理を試みている(「読みの交流を促す「問い」の条件」『臨床教科教育学会誌』第10巻第1号, 2010.5)ほか、桃原千英子(「入れ子構造を持つ文学作品の読解」『Groupe Bricolage 紀要』No.28, 2010.12)、濱田英行(「小説の読みの対話的交流における「専有」」全国大学国語教育学会『国語科教育』第68集 2010.9)らによって、新たな臨床的研究が進んでいる。

こうした読みの交流のとらえ方は、さらに大きな視点から見ると、読まれるテキストを「メディア」という観点から把握し、読み方を相対化するリテラシー実

践として捉え直すという意味合いを持っている。今井康雄は、次のように述べている(今井康雄「メディアと国語と教育」『国語科教育研究』全国大学国語教育学会第119回鳴門大会発表要旨集 2010.10 課題研究1『メディア』から国語教育の研究と実践を展望する)。他に、高木まさき、水越伸による発表があった)。

国語教育は、一方で(i)言語のなかで知覚の一定の様式を作り出し、他方で(ii)世界を描写することで言語への習熟を促進し、こうして「語る」ことと「示す」ことの間の特定の関係を言語に刻印する。

国語における読解の学習は、この(ii)の側面、すなわち個々の読みの方略を明らかにしつつ、言語的な検討によって対話による省察を導く機能を重視することで、リテラシー実践として再生する。

PISAショックが一段落して、改めて新しいリテラシー理論やメディア論を取り込みつつ、国語教育全体を見直すなかで、読解(や読書)の再検討が行われていくものと考えられる。

こうした流れの中で、「伝統的な言語文化」が小学校国語から位置づけられたことで、古典教材の読解も見直されることになる。山元隆春は、漢文の訓点・訓読の読むことにおける意味を問い直しているが、古典教材の指導理論の再検討を促すものとなっている(「漢文の訓点・訓読の学習指導の方法」全国大学国語教育学会編『新たな時代を拓く中学校高等学校国語科教育研究』 2010.12)。古典教材の読みも、広い意味でのリテラシー実践として把握されていくであろう。

(上越教育大学教職大学院)

国語教育(表現指導)

大内 善一

平成20年9月に告示された学習指導要領「国語」では、「書くこと」の領域の「言語活動例」として、小学校の第3学年及び第4学年で「詩をつくったり、物語を書いたりすること」、第5学年及び第6学年で「詩や短歌、俳句をつくったり、物語や随筆を書いたりすること」という事項が示された。中学校第2学年でも、「詩歌をつくったり物語などを書いたりすること」と示されている。

さらに、中学校では、第1学年で「関心のある芸術的な作品などについて、鑑賞したことを文章に書くこと」、第3学年で「関心のある事柄について批評する文章を書くこと」という事項も示された。

詩歌や物語・随筆の創作はもとより、鑑賞文や批評文を書くという活動はいずれも小・中学校の教育現場にとっては重い課題となろう。

こうした課題意識に基づいて、国語教育学界としてもいくつかの取り組みが出現している。本欄では、その取り組みの一端を紹介しておこう。

全国大学国語教育学会では、第117回愛媛大会において「短詩型の創作指導の意義と方法」と題したパネル・ディスカッションを開催した。その概要は、学会誌『国語科教育』第67集(平成22年3月)に収録された。テーマ設定の趣旨の中で、コーディネーターを務めた三浦和尚氏が新学習指導要領に新たに加えられた韻文創作の指導の在り方に関して「これまで実践経験の少ない創作活動について、そ

のねらいをどこに置くのか、どのように創作させるのか、どのように評価するのか、といった問題が、具体的な指導方法のレベルで顕在化してくると思われる」と述べている。

パネリストには、「俳句」の立場から坪内稔典氏、「短歌」の立場から望月善次氏、「詩」の立場から足立悦男氏が登壇した。三氏共に短詩型の創作指導に造詣の深い方々である。

協議は、コーディネーターの三浦氏の進行に基づいて、①「結社での創作と教室での創作」、②「創作に向かうモチベーション」、③「創作の方法と教師のかかわり」、④「添削と評価」、⑤「『座の文芸』という性格と教室」、⑥「創作指導で何が育つか」の6点を柱に行われた。パネリストからのそれぞれの提案に関しては、学会誌第67集を参照せられたい。

日本国語教育学会の機関誌『月刊国語教育研究』453号(平成22年1月)において、「詩歌の鑑賞と創作」という特集が組まれている。本誌では、府川源一郎氏の問題提起「詩歌の創造的鑑賞・鑑賞的創造」、特集論文として菅邦男氏の「子どもが主体的に関わる詩作活動」、森顕子氏の「詩や物語の鑑賞が創作に生きる学習指導」等4編が掲載されている。

なお、上掲の森氏の実践論文は詩歌の鑑賞文を書くことの指導とも見なすことのできる注目すべき内容である。

批評文を書くことの指導に関しては、拙稿に「批評文を書くことの指導にどう対応するか」(茨城国語教育学会編『茨城の国語教育』11号、平成22年3月)がある。「批評」概念の検討と実践への方向づけが行われている。(茨城大学)

日本語教育の表現研究への貢献

木戸 光子

2010年も含めた近年の動向として単発的研究ではなく継続的研究を取り上げる。日本語教育に直接・間接に関係し、日本語教育学としての研究理念と方法の確立が期待できる研究を紹介する。

1) 文章・談話のジャンル

日本語学習者が大学・大学院の学術的活動に必要な日本語を特定するという目的のために、論文や講義などの文章・談話が日本語教育では研究対象となっている。これらは従来の表現研究では対象にならなかった文章・談話である。模範的文章ではなく一般的かつ実用的な文章・談話に潜む構造や表現の特徴を分析し記述する。学習者が文章・談話を理解し表現するために、日本語の文章・談話のジャンル特性を明らかにしている。ジャンル別の文章構造や表現の特徴の解明も進んでいる。佐久間(2010)の講義談話の分析、村岡貴子氏の理系論文構成の分析、鎌田美千子氏のレジュメの箇条書きや作文表現のパラフレーズ分析がある。

2) 文章・談話からみた文法

品詞によらない言語形式の意味用法の解明が進んでいる。藤田・山崎(2006)の複合辞研究、接続詞と同等の機能を有する接続語句、話し言葉で使用される表現、連語やコロケーションへの着目などである。村田年氏は助詞相当句や接続語句など文型の出現頻度と文章ジャンルとの関係を統計的手法で解明している。馬場(2010)の接続詞研究の概観は広義の接続機能を担う表現を含む。

3) 相互行為の中での文法、ストラテジー
創発的文法(Emergent grammar)の影響を受けた日本語母語話者や日本語学習者の会話分析も進んでいる。相互行為の中で文法やストラテジーが生み出されていく様相を解明する。会話の相互行為の中で分裂文を分析し考察した森純子氏の論考、ポリー・ザトラウスキー氏の非言語行動を含む会話分析などがある。

以上3つの潮流の基にあるのは、日本語学で受け継がれてきた伝統的な文法範疇の限界である。複合辞や話し言葉に見られる表現の研究は実際に日本語を運用するための文法規則や談話ストラテジーの解明という日本語教育の必要性から出てきたものである。語、文のような言語単位、品詞のような文構造の文法範疇では分析・記述は難しい。

また、日本語学習者という非母語話者が日本語の言語共同体の一員となる社会変容も基にある。多文化共生という観点から日本語の表現を捉えると、日本語学習者もまた日本語話者の一員なのである。「学習者＝内なる他者」という客観的な視点から日本語の特性を再発見することが、「内的対照研究」ともいふべき日本語教育による表現研究の意義だと考える。

引用・参考文献

木戸光子「作文」『計量国語学事典』計量国語学会編、朝倉書店、2009年／佐久間まゆみ編著『講義の談話の表現と理解』くろしお出版、2010年／馬場俊臣編著『現代日本語接続詞研究—文献目録・概要及び研究概観—』おうふう、2010年／藤田保幸・山崎誠編著『複合辞研究の現在』和泉書院、2006年

(筑波大学)

認知心理学における表現研究の動向

楠見 孝

本稿では、認知心理学における表現研究の動向を、理論、方法論、トピックの3つの観点から紹介する。近年の認知心理学における表現研究の特徴は、擬音語などの語句、比喩などの文、さらに談話、物語や説明文を理解・表現する認知過程と効果、それを支える語や概念など知識の構造を、人を対象とした実験や調査、モデル化によって解明することにある。

第1の動向は、理論面での展開である。比喩の研究は、認知言語学の影響が大きく、概念比喩、イメージスキーマなどを実証する研究が進んでいる。また、文理解研究では、身体化(embodiment)理論に基づいて、読者の感覚運動的な身体経験が、文理解中のイメージの理解や生成に促進・干渉効果を与えることを明らかにしている。また、物語研究では、読者が物語を読みながら構築する状況モデルに、時間・空間、因果などの次元だけではなく、感情の次元を取り入れて、読者が登場人物の感情の変化をモニターし、共感するプロセスを説明しようとしている。

第2の動向は、方法論的展開である。注目されているのが、脳画像技術(例:fMRI:機能的磁気共鳴画像装置)を利用して、言語表現の認知過程を支える脳の機能を解明する認知神経科学的手法である。これは反応時間、視線、評定などの実験的指標だけでは優劣の評価が難しい理論やモデルの神経科学的な実在性、妥当性を示すことができる。たとえば、比喩を読解するときの文法的逸脱、知覚・運

動感覚的経験や、物語を理解するときの共感・感情が脳のどこの部位に支えられているかを明らかにできる。もうひとつは、大規模な電子テキスト(新聞・雑誌、小説・話し言葉、インターネット上のテキストなど)を用いて、そこに現れる言語表現(たとえば比喩、共感覚表現)の出現とそれらを取り巻く文脈(話者の意図や目的、同時に出現する語句など)との関連性を統計的に解析する試みである。

第3は、教育と関連する読解力の問題である。2010年12月にOECD生徒の学習到達度調査(PISA)の2009年の調査結果が公表された。ここで読解力とは「目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、テキストを理解・利用・熟考し、これに取り組む能力」である。その成績は、2000年のレベルまで改善が見られているが、格差は拡大傾向にある。認知心理学はこうした読解力を支える認知過程(情報アクセス、統合・解釈、熟考・評価)を明らかにするために、たとえば2つの対立する意見のテキストを読ませて、統合する過程の研究を進めている。さらに、こうした読解力を支える批判的思考に注目している。批判的思考には、言語表現の意味や論理構造を明確化し、表現の伝達における効果や適切性を判断するプロセスが含まれている。その点で表現研究においても今後重要なテーマになると考える。

文献

楠見 孝(編) 2010 思考と言語(現代の認知心理学3) 北大路書房

(京都大学)

文学研究(古典)

保科 恵

表現の観点から、近時の研究の動向を概観しようとする時、専門的に細分化された論考を採り上げることが、有効であるかどうか、むしろ、一般向けのものではあっても、大局的で概括的なものを採り上げて紹介することに、存外意義があるのではないかと愚考して、昨年刊行されたものの中から、表現の問題を考えるうえで興味深いと思われる著書3点を、ここに採り上げることとする。

まず、小松英雄による、仮名文の表現の特性を解明しようとする一連の著書の最新刊『伊勢物語の表現を掘り起こす《あづまくだり》の起承転結』(笠間書院、2010年8月)である。その表現するところについてはほぼ読み解き尽くされた感があると言って良いほどの有名古典である伊勢物語を、改めて、それが仮名で書かれた表現であることを前提に、読み直そうとする営為である。

一例を上げれば、初段の冒頭部分、「昔、男、奈良の京春日の里に……」と読解されて異論のない箇所について、仮名連鎖「かすか」を、「微か」→「春日の里」の複線構造の表現と捉えて、「微かに記憶に残る春日の里」という表現であるとする如きものである。

個々の所説を仔細に検討することは、ここではあまり意味がない。重要なのは、古典作品の表現を解読するうえで、一語一句の意味を切り離して考察するのではなく、仮名文の特性を踏まえ、作品の表現を解き明かす必要性を指摘している点である。

続いて、白石良夫『古語の謎 書き替えられる読みと意味』(中公新書、2010年11月)。

古典の作品において、著者自筆本が現存していることは、ほとんど皆無であると言って良い。その理由が、戦乱など、偶然の要因に求められることも少なくないけれども、本書では、古典作品の享受においては、オリジナル(=自筆本)の尊重という思想はなく、むしろ、自然な現象として、本文の定本化の中で、オリジナルを含むそれ以前の本文が放棄された結果であるとする。

上述の所説は、これに先立って刊行された、外山滋比古『異本論』(ちくま文庫、2010年7月)の説くところに、相通じるものがある。これは1978年に刊行されたものの再刊だが、上記書とほぼ時を同じくして刊行されたところに、その意義浅からぬものを感じる。

原本と異本の関係において、前者を優位とし後者を劣位と看做するのが、常識的な見解であろう。だが、作品が古典となるのは、単にそれが古いからではない。本書は異本の創造性を積極的に認定して、異本化作用によって「古典」が成立するメカニズムを、鮮やかに解明する。

古典作品の表現は、このメカニズムのうえに成立する。そういう古典表現のありようを踏まえながら、それを如何に読み解くか、ということである。

刊行から30有余年を経た今日でもなお、本書は斬新で有意義な視点を提供している。古典作品の表現を考えるうえで、現在の時点において読み直してみる意義は、けっして少なくないであろう。

(二松学舎大学(非))

文法学

藤田 保幸

もっぱら現代日本語に関する研究を念頭において述べるが、まず、日本語文法研究に今後大きな影響を及ぼしそうなものとして、国立国語研究所において構築が進められてきた『現代日本語書き言葉均衡コーパス』があげられる。これは、先に開発された『日本語話し言葉コーパス』とあわせて、実に1億語以上の規模を目指すものであり、2010年度末の完成を目指している。こうした日本語の実態を十分に反映する「代表性」を有するコーパスが完成することで、内観を有力な方法としてきた現代語の文法研究にも、新たな局面が開けるものと見られる。上記コーパスについては、近くは『人工知能学会誌』24巻5号(2009)に特集があり、多様な角度からの紹介がある。

さて、2010年度に公にされた諸研究の中で、以下特にとり上げてみたいのは、加藤陽子(2010)『話し言葉における引用表現』(くろしお出版)である。副題に「引用標識に注目して」とあるように、本書は、引用助詞「と」「って」に注目して、話し言葉における「～と」「～って」形式による引用表現を考究したもので、とりわけ文末に引用助詞を伴う「～と。」「～って。」のような文の記述に力を注いでいる。もっとも、「引用」を筆者(藤田)の考えを承けて「所与の言葉を実物表示の形で発話の内に再現する」(19頁)とする定義からすれば、本書が扱う事柄は、「～と／って」形式で取り上げられるのが「所与の言葉」と言えないものもあり、「引用表現」

と一括するのは、厳密にはやや問題があるかもしれない(いわば、「引用」の表現及びそこから用法拡張として位置づけられる諸表現を論じたものというべきだろう)。しかし、そうした小さな問題は措いて、本書では、個々の言語事実を広く整理し、話し言葉の表現として意義づけつつ、それらに一つのまとまった俯瞰を与えている。殊に、文末に「と」「って」を伴う文を全般に詳しく記述したうえで、それらの「と」「って」が、「引用」を表すものとしての標識からどの程度機能を拡張しているか(特定の文法的意味を担う形式にどの程度転じているか)についての測定を試みたことは、いわゆる「文法化」の問題とも関わって、この種の表現をトータルに考える興味深い分析と言える。

また、言語事実の観察においても、例えば、話し言葉では、「～と／って」で複数の文を引く場合、『A。B。C。』と言った』のような形ではなく、「Aと、Bと、Cと言った」のように一文ごとに並列する形がとられることがよく見られるが、これは、時間とともに消えてカギカッコ等の視覚的手段によることができない話し言葉において、引用されたコトバであることを明示するための独特の方法であるといった指摘など、種々納得させられるものがある。もとよりその所論について、筆者自身細かには見解を異にするところもあるが、本書が今後の話し言葉における引用表現の研究に際し、参照すべき一つの拠り所となるものであることは疑いない。本書を得て、引用研究もようやく一歩進展を見せたと言ってよかろう。

(龍谷大学)

文章・談話研究

石黒 圭

文章と談話の違いについて考える場合、「書き言葉としての文章」対「話し言葉としての談話」、「産出の結果としての文章」対「産出のプロセスとしての談話」という二つの立場がある。そのいずれの立場に立つとしても、2010年は談話の年であったという印象が強い。なかでも、①非母語話者の産出を対象とした研究の展開、②研究対象となるジャンルの多様化、③談話特有の機能を担う表現の記述的研究の増加、の3点が目立った。

まず、①非母語話者の産出を対象とした研究の展開であるが、日本語教育が円熟期に差しかかりつつあることを示唆しているように思う。魏志珍「台湾人日本語学習者の事態描写における視点の表し方—日本語の熟達度との関連性—」『日本語教育』144、烏日哲「中国人日本語学習者と日本語母語話者の語りにおける説明と描写について—『絵本との一致度』の観点から—」『日本語教育』145、全鍾美「初対面の相手に対する自己開示の日韓対象研究—内容の分類からみる自己開示の特徴—」『社会言語科学』13-1などが挙げられる。とくに、日本語ができない日本語学習者がどのように談話産出を習得し、日本語母語話者に近づくかという研究だけでなく、日本語が堪能な日本語学習者でも、その社会・文化的背景から日本語母語話者とは異なる個性を有するとする研究の出現に、将来性を感じた。

つぎに、②ジャンルの多様化であるが、対話ではなく、講義という独話に多面的

な光を当てた佐久間まゆみ編著『講義の談話の表現と理解』くろしお出版がその代表であり、田中啓行「講義の『談話型』に基づく受講ノートの『文章型』の分析」『表現研究』92もその流れにある。一方、電子テキスト系の研究にも勢いがあり、大沢裕子・郷亜里沙・安田励子「インターネット上のクチコミにおける苦情への返答—サイト閲覧者の視点から—」、田中弥生「質問サイトにおける情報要求モデルと待遇コミュニケーション—『アットコスメ美容事典』の談話機能・談話構造の分析から—」、李錦淑「『誘い』とそれに対する『断り』の言語行動について—日本語母語話者同士による携帯メール会話の分析から—」（いずれも『待遇コミュニケーション研究』7所収）などが見られた。今後、こうした傾向はますます強まりそうな気配である。

最後に、③談話特有の機能を担う表現の記述的研究の増加であるが、フィラー・相づち研究は健在であり、大工原勇人『日本語教育におけるフィラーの指導のための基礎的研究』（神戸大学博士論文）、石川創「あいづちとの比較によるフィラーの機能分析」『早稲田日本語研究』19、原田幸一「現代東京の話しことばにおける言語形式「たしかに」—大学生による日常会話をデータとして—」『社会言語科学』13-1などが見られた。一方、談話の構造を担うものとしては、中俣直己「並列を表す接続詞の体系的分析」『日本語文法』10-1の接続詞と、寅丸真澄「講義の談話におけるメタ言語表現の機能」『早稲田日本語研究』19のメタ言語が、今後も引き続き研究者の関心を集めそうな予感がある。

（一橋大学）

記号論

湊 吉正

最近における「記号論」の動向の一端を、私の狭い視野の中で触れることのできた五つの著書から探してみたい。

近現代における潮流としては、第一に、人文・社会・自然諸科学の間に広く浸透してきた記号論の流れがみとめられる。そしてそこにも、ソシュール(F.de Saussure)を祖とするセミオロジーの系譜に立つもの、パース(Ch.S.Peirce)に発するセミオティックスの系譜に立つもの、さらに、それら両者の融合系、もしくは関連系とみられるものがみとめられる。また第二には、数学基礎論に直結する記号論研究の流れがあげられる。

その第二の記号論研究の流れに立つものとして齋藤正彦『日本語から記号論へ』(日本評論社、2010年5月)をあげたい。日本語の表現から発して数学の基礎概念へと導くための入門書であるが、日本語のあいまいであると同時にニュアンスに富む表現を手がかりとして、明快に説明が進められていて、日本語の表現的特性を考える上でも参考になる。

先の第一の潮流におけるセミオロジーの系譜に属するロラン・バルト(R.Bartes)の『明るい部屋—写真についての覚書—』(1980<花輪光記、みすず書房、1985年6月>)をめぐり、青弓社編集部編『『明るい部屋』の秘密—ロラン・バルトと写真の彼方へ—』(青弓社、2008年8月)と、荒金直人『写真の存在論—ロラン・バルト『明るい部屋』の思想』(慶應義塾大学出版会、2009年10月)の2冊が刊行さ

れている。前者は12人の研究者それぞれの立場からの切れ味鋭い論説の集成、後者は著者による丹念な解説・分析。写真をめぐる演劇性、時間性、ストウディウム(観る人の文化的一般的関心)とプンクトウム(観る人の心に突刺さる要素)などについて掘り下げている。

米盛裕二『アブダクション』(勁草書房、2007年9月)は、先の第一の潮流におけるセミオティックスの系譜に属する。著者は、パースの提唱した推論に関する「演繹・帰納・アブダクション」の三分法に即しつつ、そのアブダクションが骨格を形成している「探究の論理学」が一般の「論証の論理学」といかに性格を異にしているか、さらに、アブダクションが創造的思考、科学的発見にいかにか重要な役割を演じてきたかについて解明している。論理的な文章のみならず詩的表現などについて考える上にも役立つものであろう。

田中久美子『記号と再帰』(東京大学出版会、2010年6月)は、先の第一の潮流における両系譜の融合系に属する。人間の自然言語の記号論と人工のプログラミング言語の記号論との統合を目指したスケールの大きな試み。例えば、記号の構成要素に関する用語として、ソシュール(シニフィアン—シニフィエ—全体論的価値)・パース(表意体—直接対象—解釈項)に対応させて著者(指示子—内容—使用)を設定している点、さらに、著者が深く検討している記号の「再帰性」の課題も、セミオロジーの系譜の中で言語記号の「反復性」「再認性」として説明されてきたものと通底するところが見いだされる点などにも、関心をひかれる。

(筑波大学名誉教授)

修辞学

森 雄一

修辞学の分野で、近年盛んに用いられている方法論は認知言語学あるいは語用論(とりわけ関連性理論)によるものであろう。平成22年においても、それぞれのアプローチからの重要な研究が公刊された。

初山洋介「百科事典的意味とメタファー」(『日本語研究の12章』明治書院)では、認知言語学の中核をなす百科事典的な意味観が、メタファーの分析において必要であることを論じている。「一般性」の程度が完全でない特徴を認めるという百科事典的な意味観の一側面に着目し、「理想例」や「ステレオタイプ」からのメタファー的拡張の実例を豊富に示す。特に「外野がうるさい」等の例に見られる「外野」が本来の野球における意味からどのようなプロセスで拡張しているのかについての分析は、筆者も長年関心を抱いていたものであり興味深かった。西山佑司・佐々木文彦「比喻表現における慣用語度について—アドホック概念形成の観点から—」(『明海大学大学院応用言語学研究』NO.12)は、関連性理論における「アドホック概念構築」(辞書上の意味概念を適宜調整して文脈にあてはめることによって表現を成立させるというシステム)の一種として比喻をとらえ、その慣用語度の度合いと辞書における記述を分析している。「辞書上の意味概念の調節」というとらえ方は、原理としてはシンプルであるが、拡張のプロセスを考えるためには、それがどのような意味概念である

か、前述の初山論文で扱われた「百科事典的な意味」との位置関係なども知りたく思う。大田垣仁「換喩と述定—内の換喩における流動的な名詞句解釈のヴァリエーションと成立可否の観点からみた—」(『語文』94)は、換喩の分類を扱った大田垣の一連の論考に連なるものである。名詞句の位置に生じる換喩を「名前転送型」と「役割転移型」に分け、さらに、佐藤信夫等が指摘してきた換喩の流動性と呼ばれる現象が生じるのは「疑似役割転送型」に限られるとしている。大田垣の示す区分が連続的なものか非連続的なものか等検討を必要とする論点も多いが、今後の論の展開が期待される。アイロニーを扱った文献としては、河上誓作「アイロニーのからくり」(『繊維機械学会誌』63(8))があり、日本語の「皮肉」という概念はあてはまりにくい、日本語のなかにも存在するものである「偽悪型アイロニー」の分析が興味深い。異分野の学会誌の巻頭言として、平易な文章で執筆されたものであるため、河上アイロニー論への入門としても有用であろう。

以上の4文献が理論的な分野での業績であったのに対し、応用的な分野で今後の発展可能性を提示してくれた論考として、妹尾俊之「広告修辞学の理論と実践」(『日経広告研究所報』251号)があった。佐藤信夫が筆名・高部伸夫を用いて執筆した『広告コピーのレトリック』(1966年)の先見性を評価し、ブランドコミュニケーションが大きな課題となった現在でも、広告論に修辞学を参照する意義が示されている。

(成蹊大学)

日本英語表現学会の歩みと現状

中本 恭平

本学会は1982年に「英語表現研究会」として発足した。『ニューズレター英語表現研究』創刊号(1983年)冒頭記事によると、「英語の表現構造と意味(中略)を研究するための(中略)場」として設立された。

たとえば、同じニューズレターの別の記事では、Why don't you sit down? という表現が取り上げられている。この文の「構造」つまり形式は特殊否定疑問文であるが、「意味」的には勧誘または命令として機能する。なぜ発話者はSit down. という命令文形式を取らなかったのか。この2つの表現形式にはどのような意味的な違いがあるのか。こういうことを研究するのが英語表現研究会の狭義の目的であった。1984年に創刊された紀要『英語表現研究』にもこの種の論文は多数発表され、最新号(2010年)にはlet aloneという表現形式が持つ意味的制約に関する論文も掲載されている。

しかし、英語表現研究会は「日本に於ける日本人による、日本人のための研究会」であり、それゆえ「英語教育と(中略)密接な関係があり、「英語教育があつて初めて英語表現ということが意識され得る」ので、「英語教育と直接結びつく」研究会と位置づけられていた(ニューズレター創刊号冒頭記事)。実際、紀要には英語教育に関係する論文が少なからず発表されており、毎年開催される全国大会のシンポジウムでも「大学における英語学習の動機付け—やる気にさせる授業の工

夫」(2009年)、「英語教育におけるCALLの有効な利用法」(2008年)といった英語教育がらみのテーマが取り上げられている。

しかし、英語教育に関する学会は国内外に大小多数存在し、教育に関心のある人はそちらに流れる傾向にある。

その一方で、英米文学の作品論・作家論というべき論文や、英語辞書編纂のノウハウを論じる論文が紀要や全国大会で発表されることもある。

学会は「音声学会」「語用論学会」のように特定の学問分野と直結している場合が多い。しかし、日本英語表現学会はその設立の趣旨からしても、「英語表現学」を極める学会とは位置づけられていない。2007年のシンポジウムのタイトルは「英語表現学の可能性」であったが、それをきっかけとして、学会内で英語表現学を樹立あるいは確立させようという動きがあったわけではない。

今日この学会も経験していることであろうが、本学会でも会員数の減少に歯止めがかからず、全国大会の参加者は少なく、紀要への投稿論文数もここ数年は一桁にとどまっている。

設立の趣旨はもちろん尊重されなければならないが、その一方で、英語の表現形式と意味との接点を求める本学会の狭義の、しかしより本質的な活動が今こそ求められている。ある英語表現をめぐって、英語学、英米文学、英語教育の各分野から学際的な研究が行われることが理想的な姿である。

付記：本記事は、筆者による個人的見解であることをお断りしておく。

(共立女子大学)

日本比較文化学会

北林 利治

日本比較文化学会は、文化の比較研究及び比較研究の方法論に基づく諸学問分野の研究を促進し、多文化間の理解と学際的な学術の発展を図ることを目的としている。日本比較文化学会のこれまでの歩みは、異文化の諸相の解明にあたった時期(第1期)から、比較文化論から比較文化学への移行の時期(第2期)、そして比較文化学の構築をめざしている現在(第3期)に分けることができる。学会誌『比較文化研究』は年5回発行され、平成22年には、第90号(9論文収録)、第91号(20論文収録)、第92号(14論文収録)、第93号(19論文収録)、第94号(35論文収録)が発行された。

表現という観点から、『比較文化研究』における研究動向を見てみると、2つの点からそれを特徴づけることができる。1つ目は、日本比較文化学会が目指している比較文化学の構築にあたっては、文化に対して多様な捉え方があるということをも前提として、複眼的な視座をもつことが重要であるという点である。比較文化学は、さまざまな分野を「文化の比較」という視点から、いわば統合し、横断させる視点を重視している。このことから、とくに言語表現を分析の対象として限っても、言語学、文学からのアプローチのみならず、歴史学、芸術学、心理学などの視点から広く言語表現を分析した論考が見られるのは、比較文化研究が学際的研究を基盤にしていることを示しているといえる。

もう1つの観点は、比較文化研究は個々の事実の記述と検討に基礎を置くという点である。日本比較文化学会の第3代会長であった芳賀馨は、「比較文化学序説」(『比較文化学論纂』1998)の中で、「比較文化学は、…個々の特殊の事実の検討から始まって、総合的共通点を求め、帰納的に一般的法則性に迫る研究分野であるべきものと思う」と述べている。比較文化学の理論的枠組構築をめざすのが究極の目標であるとしても、そのための基礎的研究として、それぞれの文化の個々の事実の検討がじゅうぶんになさなくてはならない。その意味において、さまざまな言語や文化の分析が『比較文化研究』で扱われていることは、比較文化学の構築にあたってあるべきふさわしい姿であるといえる。

平成22年度に発行された『比較文化研究』だけを見ても、分析の対象となっている言語は、日本語、英語のほか、中国語、シンハラ語、フランス語、モンゴル語、タイヤル語などであり、比較文化研究の名にふさわしいものになっている。

なお、『比較文化研究』の掲載論文のタイトル一覧は、日本比較文化学会のウェブサイト(<http://hikakubunka.jp/>)で見ることができる。

(京都橘大学)